≪何故、日本は戦ったのか≫

〈海軍編　後編〉明治という時代に学ぶ

日本海海戦完全勝利の功労者

海戦を勝利に導いた陰の功労者、否最大の功労者と言っても過言でない人物、それは**西郷従道**と**山本権兵衛**であると私は思っている。山本のリアリズムを重視し重く用い、来たるべきロシアとの戦いを予知し国防方針を山本に立てさせ、その実現の為、三笠の性能を認め購入に腐心した西郷従道と、山本の「戦い」に対する深い理解と、東郷を選んだ人物を観る目、これらが日本海海戦の完全勝利に繋がって行くのである。

日本各地で催された日本海海戦祝勝会の様子

結局、海戦の勝利は山本の精緻（せいち）な分析力、内閣の誰にも「海軍の新拡張案」の必要性を感じさせた西郷の「政治力・人間力」によるものだった。歴史は人間が作るものだが、この二人の**将軍のコンビ**は陸軍の大山と児玉の関係以上に「明治の日本」を「世界に輝ける日本」にした歴史上稀に見る最良のコンビ（人間関係）であった.....　と私は信じてやまない。この二人の将軍の「人物を観る眼力」・「将来を見通す目」・「己を滅した判断力・決断力」・「リアリズムに徹した精緻（せいち）な分析力」が日本海軍、否日本を勝利に導いたのであろう。当時のリーダーの多くは幕末から日清戦争に至る数々の修羅場を潜り抜けた猛者達であり、「勝利の要諦」を肌で知っていたのだろう。

一方、昭和の海軍の実戦体験者は、山本五十六・米内光正（最後の海軍大臣）・鈴木貫太郎（終戦時の首相）等数えるとほどしか居ない。迷わず三笠を決戦で先頭に立てた

明治海軍と、「大和」を用いず最後に犬死に等しい使い方をした昭和海軍との違いは、ここに起因するのかも知れない。

＜戦艦三笠について＞

西郷南洲については、日本人なら知らない人は居ないだろう。しかし弟従道については、明治期に少なからぬ貢献をしたことも、大人物西郷南洲の影に隠れているが兄にも劣らぬ大人物であり、桁外れの明治を代表する一大巨人だった事も知る人は少ない。己を語らぬ大西郷の弟である故に、不明なところも多いが、将の将たる実に不思議な魅力をもった巨人であった。（従道伝は次に伝える）　山本の六六艦隊実現のためには優秀な戦艦が必要だった。それが三笠であった。この艦を得る為貧乏な日本の予算には色々な難問が立ちふさがっていた、だが、西郷従道の人間力・政治力でやっと購入できた宝物の如き戦艦であった。日本に三笠が到着した二か月後、それを見とどける様に後を山本に託して、この世を去った。

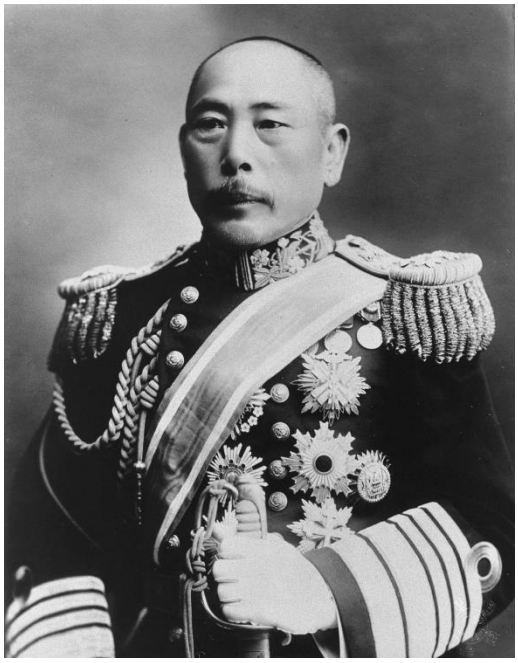
山本はこの宝物三笠を黄海海戦で惜しみなく実験した。三笠は２０発以上被弾するもびくともしなかった。この経験は日本海軍に大きな自信と信頼を戦艦三笠に抱くに至ったのである。この絶大な三笠に対する信頼が東郷にもあったからこそ東郷ターンは生まれたに違いない。明治海軍は「戦艦三笠」という「名刀」を東郷平八郎ら剣の達人たちが必要な時々に抜刀し、見事に使いこなした..... とは言えまいか？

国の将来の危機を的確に見通し、連合艦隊を勝てる艦隊に、武器的にも相手を凌駕するよう整備し、決戦に際して的確に運用できる猛訓練を繰り返す..... そんな明治のリアリズムと日本海海戦の象徴こそが「栄光の戦艦三笠」そのものであり、三笠の存在は私達に「勝つ為の要諦」とは何かを我々に雄弁に語り続けているように思えてならない。私は三笠の司令塔の艦橋最上部の東郷元帥と同じ位置に松田君と共にたちつくしながら、現在ここに鎮座し続けるであろう明治の魂の象徴である三笠が語り続け、訴え続けようとする「在るべき日本の真の在り様」をこれから訪れるであろう人々が受け取れることができるだろうか？と。

勝利に導いた二人の司令官の判断と決断、そして何故それが可能だったのか？

海戦は想定外で始まった。誤報によって敵艦隊を発見した時は正面に迎える、正に想定外の状況下にあったが、冷静に逡巡することなく捨身の大回頭（東郷ターン）を命じた東郷の決断と、敵戦艦スワロフが舵の故障による迷走を、裏をかかれたと誤解し一斉回頭の東郷の命令に反し、敵艦隊の動きを正確に察知し、命令に従わず、自らの機転で敵の逃走を防いだ上村彦之丞第二艦隊司令長官の判断が日本海海戦の完全勝利の二大勝因であることは誰の目にも疑いのない事実であろう。しかし彼等二人の司令は何故迷わず正確な判断を下し得たのであろうか。現在の我々が疑問に感じるのは７千メートルと

いう最も敵の有利な距離の前で、回頭する危険のなか、もし沈んだらどうするつもりであったのか？..... である。



上村 彦之丞

しかし東郷は敵の弾丸は三笠が引き受けたと、しかも元帥自身は最も危険な「司令塔外の艦橋最上部」に仁王立ちを続けた。現に１９発の直撃弾を右舷に受けながら、東郷を避ける如く弾丸は当たらなかった。東郷は三笠に対し、黄海戦を通じて不沈艦として絶対の信頼をおいていた。そして自ら鍛えた艦隊将兵を信じ切っていたのである。三笠が沈もうと、残った艦隊は必ず敵をウラジオストックに逃がすことなく殲滅する実力を養い身につけてきた..... との勝算を、信念として抱いていたのである。己と三笠の「運」を信じ、自ら鍛えた将兵を信じる故に捨て身で臨み、東郷ターンを躊躇なく判断した東郷の勇気と決断はこれからも世界の海戦史に長く語り継がれるであろう。

東郷ターンの決断は決してその場の思いつきや蛮勇ではなく、やるべき事を全てやり尽した後の自信と信頼から生じたものなのである。これが曇りなき判断・決断を如何に下し得たかの<u>一つの回答</u>である。

<u>その二</u>、胆力に因って生ず。

我々の生活の中でも想定外は屡、体験するところである。まして天候によって常に変化する海上の戦いでは想定通り進む事の方が稀であろう。重要なのはその「狂い」の数を如何に減らすかが必要でありまた想定外が起きた後、如何に柔軟に対応できるかである。即ち「狂い」が生じた時こそ指揮官の資質が問われるのである。その点日本海海戦に於ける東郷と上村はどの様な状況に置かれても決して狼狽えぬ冷静さと胆力が練られていた。

明治の日本海軍はこの狼狽えぬ冷静さと胆力を練る、この「躾」を伝統として継承する事に腐心したのである。「常に非常時を想定」し、その時の振る舞いこそが死命を制することを日本海軍は教え続けて来た。その象徴が東郷と上村であったのだ。この如く危機に対し平然と泰然自若として即断即決できたのは、東郷も上村も日英戦争や戊辰戦争・そして日清戦争での修羅場を潜ってきた体験が大きな影響を与えた事は間違いないであろう。

その三、安心感に因って生す。
東郷も上村も司令官として多くの命を預かっている関係上、危機に於いては様々な感情が生じ、プレシャーに晒され、判断力や決断力が鈍るのは無理もない事であろう。この様なプレッシャーの中で一歩勇気を与えてくれるのが自分の後で支え責任を取ってくれる人物が居れば悩まず思い切った決断が下せるものだ。東郷にとっては明治天皇であり、山本権兵衛であり、上村にとっては東郷である。（明治天皇は寡黙な東郷をいたくかっておられたそうである。）その他に、安心感の要因には最新鋭艦三笠や練度の高い将兵達も当然含まれていたであろう。
、
その四、無私の心に因って生ず。
無私の心が無ければ、正確な判断や決断は戦場では出来ないだろう。精神的に僅かでも私利私欲など無く、全く保身の思いが両司令官には無かったことである。少しでも己の保身の思いがあれば、三笠が大きな危険に晒される東郷ターンは行われなかったし、上村が栄達の思いが強い人物であれば命令違反を犯して「逆回頭」し、ロシア艦隊を追撃する判断や決断はできなかったはずだ。そうした私心が非常時に微少でもあれば、あのような冷静かつ大胆な大局的判断を咄嗟に下すことなど心理的にも不可能であろう。

日本海海戦時の各人が心の裡（うち）に去来したものは、「日本を守る為に自分は何をなすべきか」という「純粋無垢な思い」だけであったろう。我々は盲目的に明治の指導者や兵士の忠誠心を神聖視すべきではないが、明治維新を経て国民の多くが、日本が藩制を脱し国家という意識が生まれ、国家としての日本の「行く末」を案じ心配した「国家が国家たる時代」であった事は確かである。だからこそ東郷も上村もまた各将兵も、国の運命を左右する局面に於いて咄嗟に最善の判断・決断を下し得たのであろう。日本の歴史において、明治とはそういう時代だったのである。

現在の様に自国を、命を賭けて守る気概もなく、他国に国家の命運を委ねて守ってもらう衰弱した精神を天に恥じない国民が居るこの国を変えねば我が祖国の未来は危うい結果を招来するであろう。力なき正義は無力ではある。しかしながら武器も大量殺人化されている現代に生きる我々は、「力」は正義の後ろ盾になるものであっても、決して「力、即正義」ではない、又そうあってはならない、と戒めた山本権兵衛や米内光政の忠告を我々は重く受け止める必要がある。

我々日本人は平和を希求すべきであり、世界をその方向に動かすべきである。その為に戦争の世界を創ってはならない。我々に今必要なのは、明治の男たちが戦いながらも持ち続けた**国を思う、冷静な、暖かな熱い想いであり、人間愛である**。

この戦争では、日本人もロシア人もポーランド人も多くの人が死傷した。明治の男達は戦闘状態でなければ、気の良い男同士として肩を組んで酒を酌み交わしたであろう。日露戦争では戦場に於いても、戦後に於いてもこの暖かな人間愛は随所に見られた。私が明治を重視し明治の男達を知りたいのは、この様な公の尊重・気概と人間愛を抱いた日本精神が日本、否、世界に広がって欲しいとの思いが強いからである。結手。

平成 27 年１２月２７日

志雲会代表　有馬正能